

地域研修報告書

2016



1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

1 ……地域研修ガイダンス

2 ……地域研修1年間の流れ・研修地一覧・履修者数と実施ゼミ数の推移

4～24 ……地域研修ゼミ報告（2016年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加20ゼミ 履修者計309名）

4	浅妻ゼミⅠ・Ⅱ・2部浅妻ゼミⅠ 現場で学ぶ廃棄物処理の現代的課題 研修地／札幌市・北見市・美幌町	
5	内田ゼミⅠ 留萌市の「三省堂書店を応援し隊」とライフストーリー 研修地／留萌市	
6	大貝ゼミⅠ 農・食を軸とした十勝地域の産業の実態と支援のあり方 研修地／帯広市・音更町・芽室町・中札内村・上士幌町	
7	大貝ゼミⅡ 新潟・燕の金属加工産業の現状と課題（研磨を中心に） 研修地／新潟県燕市・三条市	
8	川村ゼミⅠ 学生アルバイトをめぐる問題 研修地／札幌市	
9	川村ゼミⅡ 若年労働者の過重労働、過労死問題 研修地／札幌市	
10	奥田ゼミⅡ 新幹線開業を契機とした函館地域経済の展望について、 さまざまな切り口から考える 研修地／函館市	
10	佐藤ゼミⅠ 歌登地区の地域おこし協力隊と観光の取り組み 研修地／枝幸町	
12	佐藤ゼミⅡ 石狩市における自治体合併10年後の地域づくり 研修地／石狩市	
13	中園ゼミⅠ・Ⅱ ニセコ町における産業振興と人材育成 研修地／ニセコ町	
14	徐ゼミⅠ・Ⅱ・2部徐ゼミ 外国人観光客誘致の実態調査：旭山動物園 研修地／旭川市	
16	西村ゼミⅠ・Ⅱ 新幹線時代の道南・江差町の『観光まちづくり』 研修地／江差町	
17	平野ゼミⅠ・Ⅱ 陸別町における地域振興商品開発とフェアトレード 研修地／陸別町	
18	古林ゼミⅠ イカを中心とした地域経済の構造を理解する 研修地／函館市	
19	古林ゼミⅡ 日高地方における軽種馬の生産・育成・流通 研修地／浦河町・新ひだか町・様似町・日高町	
20	水野ゼミⅠ・Ⅱ 北海道開拓当初の囚人労働を学ぶ 研修地／月形町・当別町	
21	水野谷ゼミⅠ・Ⅱ 過疎地域のまちづくり 研修地／厚沢部町・木古内町	
22	宮入ゼミⅠ・Ⅱ 果樹産地の現状と農業による地域活性化の可能性 研修地／仁木町・余市町	
23	山田ゼミⅠ 地域ブランドを生かした余市町の課題 研修地／余市町・小樽市	
24	山田ゼミⅡ 沖縄の観光振興の現状と課題 研修地／沖縄県北谷町・那覇市・読谷村	

25 ……地域研修報告会

2016年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部 部長

佐藤 信



「地域研修」は2003年の地域経済学科開設と同時に開始した科目です。当初は地域経済学科の独自科目として位置づけてきましたが、経済学科でも複数のゼミで実施するようになり、経済学部と地域社会との関わりを深める科目として発展してきました。最近では、地域を対象とした課題解決型科目あるいはフィールドワーク科目として内外で注目される存在ともなっております。

地域研修のテーマも年々多様化し、研修先も北海道内にとどまらず、遠く沖縄まで拡大しております。研修内容も、自治体調査に加えて、住民へのアンケート調査、企業訪問などと広がりを見せており、その成果は、学内での「地域研修報告会」や「地域研修報告書」のほか、研修先での地域報告会を通して還元しております。

地域研修には以下のような意義があると考えます。第一に、1～4年次にわたるゼミ活動にあつては、地域社会の一層の理解のためにはゼミと一体で取り組まれる地域研修が有効であること。第二に、地域研修の実施においては、学生たちの相互協力による準備、研修先における苦労や喜びの共有、これらを通じた学生たちの成長が期待できること。第三に、成果報告のためのプレゼンテーション資料や報告書の作成は、単なる既存資料の利用にとどまらずに、学術的にも価値のあるオリジナルな成果をもたらす可能性を有していること等が挙げられます。

今後、「地域研修」の一層の充実のため、より長期にわたる地域研修の実施や2部カリキュラムへの導入等の検討をすすめているところです。

地域研修の実施にあたっては、何よりも、地域住民や自治体、企業・団体など多くの方々のご協力をいただいております。皆さまのご協力に対して、ここにあらためて厚く御礼を申し上げます。

地域研修ガイダンス

2016年4月16日 50番教室



地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修（フィールドワーク）が中心ですが、そのためには事前の学習、研修後にその成果をレポートにまとめる作業、報告会でのプレゼンテーションまで、これまでの教室での講義・理論の要素に加え、実践的な学びが必要とされる複合的な学習です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、関連自治体・団体などから提供された資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では関連自治体・団体・企業などからのヒアリングを行い、関連施設の見学や実地見聞、実態調査などを行って研修内容を深めます。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

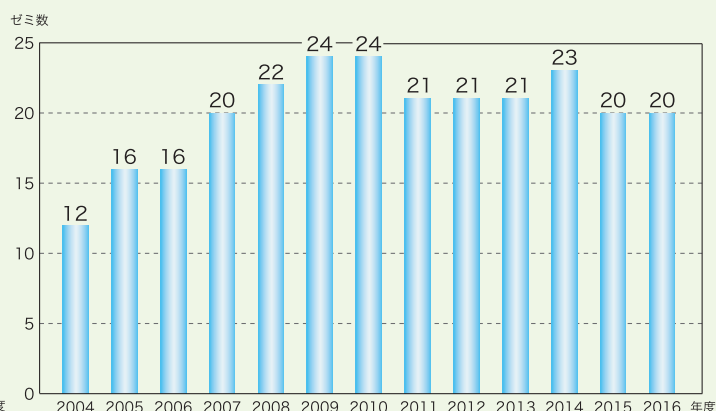
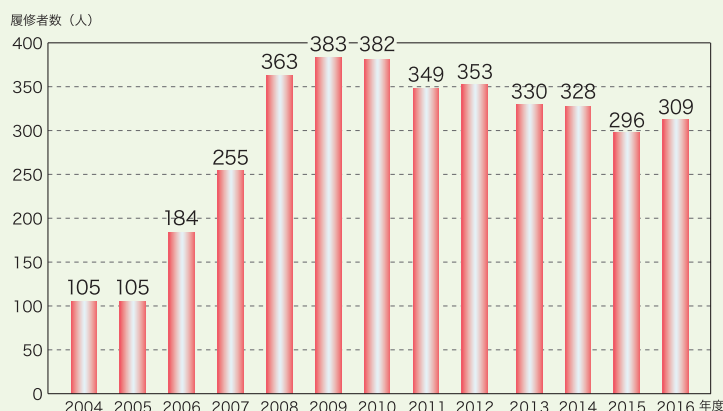
3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



①② 地域研修ガイダンス。③④⑤⑥ 事後学習と報告会へ向けての準備。⑦⑧ 地域研修報告会でのゼミ発表。

地域研修履修者数と実施ゼミ数



研修地一覧



留萌振興局管内

A 留萌市 内田ゼミⅠ

空知振興局管内

B 月形町 水野ゼミⅡ

石狩振興局管内

C 当別町 水野ゼミⅡ

D 石狩市 佐藤ゼミⅡ

宗谷総合振興局管内

J 枝幸町 佐藤ゼミⅠ

上川総合振興局管内

K 旭川市 徐ゼミⅡ・2部徐ゼミ

オホーツク総合振興局管内

L 北見市

浅妻ゼミⅡ・2部浅妻ゼミⅠ

M 美幌町

浅妻ゼミⅡ・2部浅妻ゼミⅠ

E 札幌市

浅妻ゼミⅡ・2部浅妻ゼミⅠ

川村ゼミⅠ、川村ゼミⅡ

後志総合振興局管内

F 小樽市 山田ゼミⅠ

G 余市町

宮入ゼミⅢ、山田ゼミⅠ

H 仁木町 宮入ゼミⅡ

I 二セコ町 中園ゼミⅡ

十勝総合振興局管内

N 陸別町 平野ゼミⅡ

O 上士幌町 大貝ゼミⅠ

P 芽室町 大貝ゼミⅠ

Q 音更町 大貝ゼミⅠ

R 帯広市 大貝ゼミⅠ

S 中札内村 大貝ゼミⅠ

日高振興局管内

T 日高町 古林ゼミⅡ

U 新ひだか町 古林ゼミⅡ

V 浦河町 古林ゼミⅡ

W 様似町 古林ゼミⅡ

檜山振興局管内

X 厚沢部町 水野谷ゼミⅡ

Y 江差町 西村ゼミⅡ

渡島総合振興局管内

Z 木古内町 水野谷ゼミⅡ

AA 函館市 奥田ゼミⅡ

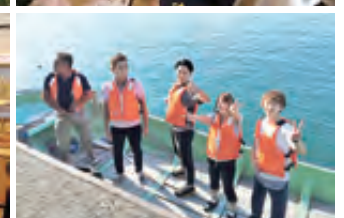
古林ゼミⅠ

燕市 大貝ゼミⅡ

三条市 大貝ゼミⅡ

北谷町・読谷村 山田ゼミⅡ

那覇市 山田ゼミⅡ



浅妻裕ゼミⅠ・Ⅱ 2部浅妻裕ゼミⅠ

参加学生数 34名



浅妻 裕
経済学科
教授



北見市プラスチック処理センターで

現場で学ぶ廃棄物処理の現代的課題

研修地：札幌市・北見市・美幌町

●研修目的

近年、メディア等がかつて深刻とされた廃棄物最終処分場のひっ迫やダイオキシンなどの廃棄物処理問題が取り上げられる機会は少ない。リサイクル法制により廃棄物処理問題は解消されたのか。実は多様な問題が積み残されており、現場からこれらを学ぶことを目的とした。

研修地・日程

- 7月13日 駒岡資源選別センター
駒岡清掃工場
- 9月12日 北見市役所市民環境部
クリーンライフセンター
北見市プラスチック処理センター
北見市上下水道局浄化センター
留辺蘂町花園堆肥センター
- 9月13日 美幌町役場
美幌町リサイクルセンター
美幌町一般廃棄物最終処分場
- 11月8日 創成川水再生プラザ（下水処理場）

写真キャプション ① 北見市クリーンライフセンターで廃プラを前に。臭いはほぼない。② 活発に質疑を行う。③ 下水浄化の仕組みを現場で学ぶ。④ 美幌町役場にて廃棄物処理行政を学ぶ。⑤ 美幌町リサイクルセンターで選別方法を学ぶ。⑥ 食事風景。



●総括

現在、市町村によるごみ収集は、資源ごみと可燃ごみ、不燃ごみ等に細かく分かれていることが一般的である。多くの場合、一定の頻度を必要とする分別収集や、品質を高めるための手選別・機械選別などを伴っている。これら市町村による廃棄物処理・リサイクルに関わるコストは現在、一般財源のおよそ3%強となっている。廃棄物発生量が減少しているため総額は減少傾向にあるが、トン当たり処理費は上昇し4万円を超えている。現代社会は、多額の費用をかけながらリサイクルを行っているようにも見える。この問題に対しては集団回収をより積極的に活用するなどが考えられる。また現場では分別不十分な事例が多々見られ、これらもコスト増の要因となっている。市町村合併を行った自治体では旧来からの分別ルールが混在している状況があり、これが市民の混乱を招くとして統一に向けた動きもある。

また、廃棄物処理に関わるインフラの老朽化問題が今後顕在化してくる。各地域では下水処理プロセスから大量の下水汚泥が発生しているが、北見市では汚泥処理施設の老朽化問題、札幌市では札幌オリンピック前後に急速に増加した下水道インフラ全体の更新課題となっている。

学生研修記

武田 光南美
経済学科2年
岩見沢東高校出身



地域特性と廃棄物処理・リサイクルの課題

今回、各地の廃棄物処理・リサイクルに関する課題を学んだが、その地域間の違いが大きな発見であった。北見市と美幌町では焼却処理と埋め立て処理で異なっている。埋め立てには限界があり、美幌町では焼却への切り替えも考えているようだが費用面から埋め立てという選択肢を取らざるを得ないのが現状である。またごみ収集や分別方法も両市町で異なっている。地域毎に処分地等の環境、人口規模や面積が違い、これらに起因した諸課題があるので、分別ルールをはじめ全体の仕組みが異なるのはやむを得ないが、この不統一が混乱を招いているとも思える。より大きな枠組みの中で仕組みを考える必要がある。また、今回、疑問を持つことの大切さも学んだ。積極的に対象に関する関心を深め、理解する姿勢がないと疑問は生まれないし、現場でも話を聞くだけになる。次回は更に積極的な姿勢で臨みたい。

村井 優斗
2部経済学科2年
札幌啓成高校出身



下水処理の現場から見た循環型社会

2部ゼミ1では、下水処理、特に下水汚泥を対象として調査・研究を行いました。これまで、下水処理とは単に濾過を繰り返して川に戻すものと考えており、また、汚泥については関心を有しませんでした。今回の研修過程から、下水処理は微生物による有機物の吸収・分解、増殖の力を利用して上方に綺麗な水を生み出すプロセスということがわかりました。温度などに起因する微生物の健康状態が処理能力と関係していることが興味深かったです。また、下水汚泥については、一定の処理を行った後に堆肥に作り替え、これらを地元住民に無料配布するなど、リサイクルが進んでいます。札幌や北見では最終処分量が非常に少ないことが驚きでした。さらに汚泥の消化タンクから発生するガスは発電に利用されています。下水処理と廃棄物処理・リサイクルが深い関係を有していることがわかりました。

内田和浩ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 11 名（うち聴講生 2 名）



内田 和浩

地域経済学科
教授



留萌市の「三省堂書店を応援し隊」とライフヒストリー

研修地：留萌市

●研修目的

本地域研修では、前期のゼミ I で学んだ質的調査法を用いて、留萌市におけるまちづくりのリーダー（ここでは「三省堂書店を応援し隊」の中心メンバー）3 人へのライフヒストリー法による聞き取り調査を行い、そのまちづくりへのプロセスを明らかにしようとした。

研修地・日程

- 8月6日 大学にて事前学習、ライフヒストリー調査の質問項目についての確認と地域研修全体の打ち合わせ。
- 8月8日 三省堂書店留萌ブックセンター見学。留萌市役所にて地域政策課職員より「留萌のまちづくり」について説明を受ける。市立病院、留萌プラザ、市立留萌図書館等を見学。ライフヒストリー調査Ⅰ① 三省堂書店留萌ブックセンター店長からお話を聞く。その後、「三省堂を応援し隊」メンバーと懇親会。
- 8月9日 ライフヒストリー調査Ⅱ①・Ⅲ① グループ毎にテープお越し作業。
- 8月10日 ライフヒストリー調査Ⅰ②・Ⅱ②・Ⅲ② 留萌市内のフィールドワーク。

写真キャプション ① 三省堂書店留萌ブックセンター見学。② 市役所で説明を受ける。③ 店長さんから話を聞く。④ 「応援し隊」メンバーとの懇親会。⑤ ライフヒストリー調査。⑥ 市内フィールドワーク。



●総括

前期のゼミでは、「質的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から優れたまちづくりの実践を紹介し合った。そして、訪問先として「三省堂を市民が誘致した」で有名な留萌市を選び、3 グループに分かれてリーダー（「三省堂書店を応援し隊」）3 名について、ライフヒストリー調査を行うための準備学習を行った。

地域研修では、初日に留萌市役所で「まちづくりと総合計画」について話を聞くとともに、出張書籍販売の場所である市立病院・留萌プラザと留萌図書館を見学した。夜には、留萌ブックセンターの店長から話を聞くとともに「応援し隊」のメンバーと懇談した。そして、個々のリーダーへの聞き取り調査では、それぞれ 2 回にわたる聞き取り調査を行った。リーダーたちが、何を考え、どんな経験や出会いから学び、どんな実践に取り組んできたのか、そして今後どんなことを展望しているのか。まさに、質的調査法を用いてそのプロセスを明らかにしようとする取り組みだった。

学生たちはこれらを通じて、留萌に住む人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験し、「地域で暮らす」とはどういうことなのかを少しでも理解することが出来たと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学 生 研 修 記

松下 勇輝

地域経済学科 2 年
札幌新川高校出身



水野 由惟

地域経済学科 3 年
滝川西高校出身



留萌市地域研修を終えて

私たちは、質的調査法によりまちづくりのプロセスを明らかにするため留萌市で二泊三日の研修を行いました。初日は三省堂書店留萌ブックセンターを訪問した後、市役所や図書館などを見学し留萌市の総合計画やまちづくりについて学びました。

その後は、三組のグループに分かれ 2 日にかけて三省堂誘致に関わった 3 名のリーダー層に聞き取り調査を行いました。聞き取りでは、町から書店がなくなってから本屋誘致までの三者の意識変化を中心に活動以前のそれぞれのライフヒストリーについても調査しました。この研修に参加するまでは、大人にこのようにインタビューするという機会はなく、調査対象者からの確かな内容を聞き出すことの難しさを身をもって知りました。

今回の地域研修は、調査対象者からの聞き取りを通して得た刺激も多くこれからの学生生活に関わる大変貴重な経験になったと感じています。

地域研修を終えて

私たちのゼミでは、留萌市に行き、まちづくりリーダーについて 3 名のリーダーに 1 グループ 3,4 名に分かれて聞き取り調査を行いました。

町から本屋（成文堂）がなくなるという課題に市民が一つになって協力し、取り組んできたことについて調査し、地域の力で本屋（三省堂書店）を呼び、本屋を取りもどしたことに驚きました。

実際に本屋の中を見学したときに、札幌にある本屋より広く快適でした。そのほかに図書館や市役所でもお話を聞かせていただき、地域の絆の強さを感じました。

今後の本屋の存続活動や地域発展に向けてどのような取り組みをしていくのが課題だと思います。

留萌のたくさんの魅力に触れることができたので大変有意義な研修になりました。



大貝健二ゼミ I

参加学生数 12 名



大貝 健二

地域経済学科
准教授

農・食を軸とした十勝地域の産業の実態と支援のあり方

研修地：帯広市・音更町・芽室町・中札内村・上士幌町

●研修目的

本研修の目的は、以下のとおりである。第1に、国内最大の大規模畑作地帯において、大規模農業経営者や、農業関連産業企業は、いかに戦略的な展開を行っているのかを学ぶこと、第2に、行政による地域産業支援は、どのように行われているのかを学ぶことである。

研修地・日程

8月31日	帯広市役所
9月1日	ソーゴー印刷株式会社、株式会社柳月、アグリシステム株式会社、有限会社尾藤農産、株式会社大野ファーム、有限会社十勝しんむら牧場
9月2日	前田農産合資会社、株式会社満寿屋商店、株式会社山本忠信商店、株式会社K'sファーム、株式会社十勝野フロマー、十勝品質事業協同組合
9月3日	株式会社はるこまベーカー 現地報告会

写真キャプション ① 大野ファーム。② 株式会社柳月。③ 十勝しんむら牧場の放牧酪農。④ 前田農産。⑤ 満寿屋商店。⑥ 現地報告会。



●総括

本研修は、その最初からイレギュラーの連続であった。8月中旬から十勝地方を襲った台風により、札幌から十勝への移動網が寸断された。なんとか通じていた丸瀬布、置戸経由ルートで十勝入りし、実に7時間を要した。

当ゼミでは、これまでに何度か地域研修で十勝を訪問しているが、行くたびに農業と農業関連産業において、新たな動きが始まっている。十勝産小麦を用いたパンづくりが、パン屋さんでは当たり前のように、今ではパン屋と地域内製粉工場とのつながりが密になっているほか、十勝オリジナルチーズをつくるためのネットワークも生まれている。

また、農業経営者においても、SRUなど農業において必要な土づくりを行うネットワークができているし、積極的な活動を展開している。

今回の訪問をもって十勝全体を理解したということでは決してないが、十勝の強みの一側面は経験することができた。人的・組織的ネットワークの複雑性、重層性はあるものと確信しているが、十勝の強みの本質は一体なんであるのか、これを明らかにすることが今後の課題である。

学生研修記

木村 拓貴

地域経済学科 2年
北海道出身

平間 亮介

地域経済学科 2年
北海道出身

日本の食料基地 十勝を訪れて

私たちは8月31日～9月3日まで今年の夏に大規模な台風が直撃した十勝へ研修に行きました。研修では2グループに分かれヒアリング調査を行いました。私のグループは十勝の中でも6次産業化をすすめている大規模農家やチーズ工房、そして十勝のチーズを全国へ広めようとしている組合を訪問しました。ヒアリングを行い、農家さんであればよい作物を育てるために良い土が必要だと考え土づくりにこだわっているお話や、チーズの協同組合をつくるにあたっての経緯を聞いたりしました。今回訪問先で話を聞いて率直に思ったことは、「十勝を盛り上げたい」、「十勝の魅力をもっと広げたい」など十勝のためを思って活動しているのだなと感ずることができました。

今回訪問した場所を十勝の基準と考えずに、もっと全体を見渡して十勝をみて強み・弱みを考えていくことが今後の課題です。

十勝を訪問して

初日は帯広市役所に行き帯広、十勝の概要、十勝フードバレーについての話を聞きました。2日目からは2グループに分かれ合計12社を回りました。私の訪れた企業は有名な柳月や農家さん、製粉工場、パン屋さん、出版社と多様でした。

十勝は全国屈指の小麦産地です。6社中5社が小麦に関わる企業でした。関わり方は違っても、十勝の小麦をより良く、安心安全に、「小麦といえば十勝の小麦」と同じベクトルを向き、試行錯誤を繰り返していました。各企業は業態が異なるにも関わらず、他企業、生産者、消費者との関わりを大事にしているように感じました。

今回訪問した企業は、共通して十勝の魅力を発信していくように活動していましたが、それ以外の十勝の農家、小麦に関わる企業は果たして同じ目標を持って活動しているのか、それを今後調査していきたいと思いました。

大貝健二ゼミ II

参加学生数 6名



大貝 健二

地域経済学科
准教授

新潟・燕の金属加工産業の現状と課題（研磨を中心に）

研修地：新潟県燕市・三条市

●研修目的

燕市は、金属洋食器などで知られる地場産業産地である。経済のグローバル化の進展と、担い手不足により縮小局面に入っている。こうした現状で、産地を支えてきた磨き屋が、どのような事業を展開し、また課題を抱えているのかを明らかにすることが本研修の目的である。

研修地・日程

9月5日	玉川堂 燕市役所 燕商工会議所
9月6日	燕市産業史料館 磨き屋一番館 ㈱山崎研磨工業
9月7日	三条鍛冶道場 ㈱今井技巧 燕三条工場の祭典事務局
9月8日	㈱RK 小林研業 地酒防衛軍

●総括

本研修で明らかになったことは次の通りである。第1に、磨き屋シンジケートという共同受注組織に加入している磨き屋は、域外受注を増やしているということである。マスコミ報道等を活用し知名度を上げ、独自ブランド商品に加え、積極的な展開を見せていた。こうした人気がある磨き屋では、若手の職人も育成しており、今後の事業展開も見通していることが明らかになった。第2に、シンジケートに加わっていない、圧倒的大部分の部分的磨き屋では、加工賃単価が構造的に低く抑えられているのではないか、ということである。加工賃単価が低ければ、仕事としての魅力がなく、新たな担い手を見つけることが難しい。いかにして単価を上げていくのが課題であると言えよう。第3に、地方自治体による産業支援の難しさである。燕市では、磨き屋一番館という、磨き技術の後継者育成施設を運営しているが、3年間の研修後に磨き職人として就職・独立している人たちはそんなに多くはないという印象を受けた。また、磨き工程に特化しているがゆえに、プレスや熱処理といった他工程との兼ね合い、調整の難しさも同時に持ち合わせていることがヒアリングから明らかになった。

学生研修記

伊藤 昂

地域経済学科 3年
札幌清田高校出身

中川 大輔

地域経済学科 3年
札幌平岸高校出身

燕市を訪れて

私達は、3泊4日の日程で新潟県燕市でのヒアリング調査を行いました。経済のグローバル化により、苦しい状況である日本の地場産業の取り組みに関心を持ち、金属研磨で有名な燕市を訪問しました。その中でグローバル化に対応する形で進めている、磨き屋シンジケートというインターネットから様々な工程に対応した共同受注の組織の取り組みにとっても興味を持ちました。これにより新たな販路の拡大や独自ブランド商品の開発を進めており、またシンジケート未加入の企業でも自社ブランドの立ち上げや法人化など、産地全体で現代の社会情勢に上手く対応しているという印象を受けました。その他研磨職人の担い手不足や高齢化といった課題の発見もありました。このように北海道ではあまり聞く機会が少ない貴重な話を聞くことができ、とても有意義な研修を過ごすことができました。

情熱を持って取り組む仕事

僕がヒアリング調査に行く前に、磨きとはどういうものなのかイメージがうまく定まりませんでした。そんなまま現地に行き、普段目にするのしない職人が働く姿を生で見ました。そこで、磨きとはホイールにバフをつけ、それに研磨剤をつけてハウスウェア製品や洋食器などの製品を磨いていくものであるということがわかりました。また、ヒアリングを通していろんなお話を聞いたのですが、そんな中で自分たちの磨く製品に対するこだわりについてのお話が特に印象に残っています。自分たちの仕事に誇りを持ち、情熱を持っているということを感じ取った時にはとても感動しました。今回の研修を通して、情熱をもって仕事に取り組む姿は本当に楽しそうで素敵であると思いました。自分も情熱持ち、やりがいのある仕事に出会えれば良いと考えさせられました。

写真キャプション ① 燕商工会議所ヒアリング。② 磨き屋一番館。③ 三条鍛冶道場。④ ㈱山崎研磨工業。⑤ 歴史を物語る史料。⑥ オール研磨の自動車。



川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 17 名



川村 雅則

経済学科
教授学生アルバイトをめぐる問題
若年労働者の過重労働、過労死問題

研修地：札幌市

●研修目的

○社会問題として認知されてきた学生アルバイトをめぐる問題を明らかにし、学生や教育機関に何ができるかを考えるために、今年度も、2年生を中心に、学生アルバイト調査（聞き取り、アンケート）を行い、『学生アルバイト白書』をまとめた。

○若年層にも広がる過重労働と、過労死・過労自殺。その実態と問題解決策を考えるため、被災者遺族や、労災支援にあたるNPO関係者と弁護士、加えて、地域の労働組合関係者から話を聞いて、論文を執筆した。

研修地・日程

前期	若者の雇用や労働法に関する学習。 学生アルバイトの聞き取り調査を実施。 人文学部の学生に、学生アルバイト問題の講義（3年生）。 日本学生経済ゼミナール大会への参加準備を開始（3年生）。
夏季休業期間	札幌地域労組事務所を訪問して、労働組合についての学習（8月15日）。 地下歩行空間で開催された反貧困ネットワーク北海道主催「生活相談会・学習会」で、学生アルバイトをめぐる問題について報告（9月4日）。
後期	飲食店で働く学生を対象としたアンケート調査を実施。 『学生アルバイト白書2016』のとりまとめ作業に従事。 NPO法人働く人びとのいのちと健康を守る北海道センターを講師に、過労死問題について学習（9月30日）。 過労死遺族と弁護士を講師に、過労死問題について学習（10月21日）。 大学生が考える過労死問題シンポジウムを本学にて開催（11月25日）。 学生アルバイト問題を考えるシンポジウムを本学にて開催（12月13日）。

写真キャプション ① 田中(綾)ゼミ所属の学生にアルバイト問題を講義。② 札幌地域労組にて鈴木一さんを講師に学習。③ この話は将来役に立つと真剣に聴講。④ 食事をしながらアルバイト先の労働相談。⑤ 地下歩行空間にて反貧困ネットワーク北海道の相談会・学習会。⑥ 学生アルバイト問題を市民に講演。⑦ いのけ道センターの佐藤誠一さんに学ぶ過労死問題。⑧ 過労死遺族と弁護士による深刻なお話。

●総括

学生アルバイトをめぐる問題については、世間にかかなり知られてきた気がする。ゼミで毎年行っている調査活動と『学生アルバイト白書』づくりもそこに貢献していると思われる。今年も、聞き取り調査と、飲食店で働く学生を対象にしたアンケート調査を行った。アルバイト先での問題は、例年の調査にみられる通りで、今年の調査でも例えば、賃金不払い労働、勤務・働き方に関する問題（シフトに勝手に入れられる、休憩に入れない）、厳しい叱責・パワハラなどがあげられた。ワークルールを知らずに働き始めている学生が少なくないことも気になった。

問題の解決策として、ワークルールを学ぶことはもちろんだが、労働条件は労使が対等の立場で決めるものであり、使用者が一方的に決めるものではない、という自覚が必要である。そこで今年も、地域の労働組合（札幌地域労組）を訪問し、労使関係・労働組合の重要性について、具体的な相談事例・取り組みにもとづきながら学んだ。

以上の詳細は、『学生アルバイト白書2016』を参照されたい。

→<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index> からダウンロード可

学生研修記

高橋 大樹

経済学科 2年
士別翔雲高校出身

様々な労働問題を知った上で

今回私たちは、学生アルバイトの実態を中心に、様々な労働問題を学んできました。

正直、このゼミに入る前は労働問題にあまり関心がありませんでした。しかし、北海学園生のアルバイト調査に取り組んだり、札幌地域労組やNPO団体など関係者からお話を聞くなかで、日本の労働実態やワークルールを若者が知らないのは危険だと分かりました。理解が深まるとともに学ぶ意欲も高まりました。

未払い残業や、仕事でミスをした場合に給料から天引きされるなどをアルバイトで経験した方もいると思います。それが間違いだと気づけること、対処方法を事前に知っていることの大切さを学びました。

実際には、労働問題やワークルールを知らずに働いている人が多いことが調査で明らかになりました。高校段階からアルバイトをする人も多いので、学ぶ環境を整えることが必要だと思いました。

中村 優太

経済学科 2年
北海高校出身

身近にあるアルバイト問題を学んで

この一年間、私たちは、学生アルバイト問題を中心に学んできました。労働問題や労働法・労働組合に関する文献を読んで大事な点をまとめたり、北海学園大学の学生を対象にした聞き取りやアンケートを実施しました。調査活動では、長時間労働や残業代の不払い、ミスに対する給料からの天引きなど、様々な問題がアルバイト現場でも発生していることがわかりました。そして、夏季休業期間中には、札幌地域労組という組合を訪問して、労働問題の解決策を具体的に学びました。

みなさんの中にもアルバイトをしている人は多いと思います。働いていて、これはおかしいと思ったことはありませんか？ 大切なことは、労働者としての権利や働く上でのルール（ワークルール）をどれだけ理解しているかということです。実際は多くの人がそれを知らない状況です。この現状を変えることがなによりも大事だと思いました。



1



2



3



4



過労死問題シンポジウムを終えた達成感



シンポの様子が『北海道新聞』に掲載

過労死問題シンポジウム(学内)



NHK札幌放送局に取材を受ける

3年生は、日本学生経済ゼミナール大会（インゼミ大会）に参加するため、若年労働者にひろがる過重労働、過労死問題を調査・研究テーマに設定して、文献研究、論文の執筆を進めてきた。その上で、過労死問題をより具体的に学びたいという問題意識で、後期に入ってから、労災申請の支援などを行っているNPO団体（働く人びとのいのちと健康を守る北海道センター）を講師にお話を聞いたほか、過労死遺族と弁護士を講師に学習を深めた（後者は、2016年から厚生労働省で始められた「過労死防止・労働条件に関する啓発授業」の一環でもある）。

こうした調査・研究の成果を論文にまとめて、12月に山口大学で開催されたインゼミ大会で報告したほか、その前に、過労死問題をテーマに学内でシンポジウムを開催した。大手広告代理店における新入社員の過労自殺が社会的に大きな問題になったこともあって、ゼミ生たちの取り組みは報道機関にも何度か取り上げられた。

また3年生は、他学部のゼミ生や市民に、アルバイト問題の講義・講演も担当したことを付記しておく。

学 生 研 修 記

藤岡 宣裕
経済学科3年
札幌第一高校出身



伊藤 紗瑛
経済学科3年
大麻高校出身



地域研修を通して見た過労死問題

僕たち川村ゼミⅡは、現代日本の雇用、労働、生活問題について学ぶ中で、近年増加している「過労死問題」に焦点をあてて調査活動を行ってきました。

地域研修の活動として、まず、札幌地域労働組合を訪問し、労使関係、労働組合について学びました。「労働者と使用者は対等であること」「職場で辛い目にあっても泣き寝入りしないことの大切さ」などを学び、良い職場環境を作るためには労働組合の存在が大切であることがわかりました。後期に入ってから、過労死被災者・遺族の支援をしているNPO関係者や遺族の方などから話を聞いて、病院における過酷な労働実態——長時間夜勤や新卒看護師には厳しすぎる過酷な仕事の実態を知りました。関係者から実際に話を聞くことで、過労死問題というものがどんなものなのかをより深く知ることができた気がします。

職場での働かされ方

「過労死」。これは私たちが学んできたテーマです。年々増加する労災請求件数の中で、特に若者の過労自殺が増えてきています。背景には、時間外労働の労使協定（36協定）をめぐる制度問題や日本経済が辿ってきた企業中心社会の構図、日本的雇用など多くの問題が絡んでいます。先行研究などからこれらを学んだ上で、過労死の実態を明らかにしようとNPO法人働く人びとのいのちと健康を守る北海道センター、被災者遺族や弁護士の方々にお話を聞きました。長時間残業や達成困難なノルマの要求で心身ともに疲弊していく実態が見えてきました。

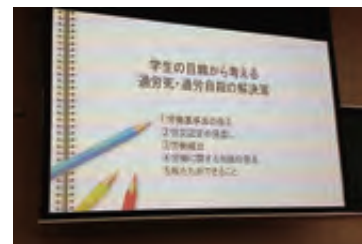
以上を踏まえ、労働基準法の改正や労災認定の見直し、労働組合のあり方、労働教育や過労死防止法の活用といった、過労死問題の解決策を私たちなりに考え、みんなで執筆した論文を手にインゼミ大会で学びを深めてきました。



シンポを前に何度も繰り返し練習



いざ発表



学生が考える問題解決策も提示

日本学生経済ゼミナール大会



山口大学で開催されたインゼミに参加



対戦校との2日間にわたる討論・健闘をたたえ合って



5



6



7



8

奥田仁ゼミⅡ

参加学生数 12名・大学院生2名



奥田 仁

地域経済学科
教授新幹線開業を契機とした函館地域経済の展望について、
さまざまな切り口から考える

研修地：函館市

●研修目的

グループごとにテーマを設定し
独自に訪問調査を行うことにより、
①社会人としてのマナーや現状認識
力を身につける、③調査内容を掘り
下げて分析し取りまとめる、③調査
結果を地域全体の視点から捉え提言
を行う、④共同活動を通じた学生同
士の連帯を目標とした。

研修地・日程

- 9月5日 午後函館到着後4グループそれぞれに訪
問聞き取り調査。
夜、ミーティングで相互に報告
- 9月6日 午前・午後、それぞれ訪問聞き取り調査。
夜、函館山夜景鑑賞、ミーティング
- 9月7日 午前自由行動、補完調査。
午後帰札

写真キャプション ① 函館市都市建設部で。②
函館の歴史的風土を守る会の会長さんと（ラッキ
ーピエロで）。③ スイーツ推進協議会での聞き取
り。④⑤ いさり火鉄道での乗客インタビュー調
査。⑥ 五島軒本店の店長さんと。⑦ ハセガワス
トア社長と。



●総括

地域研修の場所はグループごとに候補地と、研究内容を出し合い、全体の討論で函館に決定した。
12名の学生が3名ずつの4グループに別れ、小テーマを設定するとともに、文献・ネット情報などで
事前研究をおこなった上で、研修期間中の訪問先、聞き取り内容を決定した。各グループの小テーマ
は、④ 函館の歴史的建造物の保存と利用、⑤ いさり火鉄道の課題と展望、③ 食の街函館、① 函館
の菓子産業 である。訪問先の例をあげると、函館街中プロジェクト、いさり火鉄道、ラッキーピエ
ロ、ペイストリー・スナッフス、函館市役所など、企業、NPO、行政機関など、それぞれ4～5
箇所で、グループによっては帰札後も例えばJR貨物など関連先に補完的調査を行っている。これら
の選定、アポ取り、訪問は全てグループの学生だけで行っている。その成果をパワーポイントを利用
した報告プレゼンテーション、次いでA4で10数ページの論文にとりまとめ、そのなかでは必ず課題
の指摘と提言を行うこととしている。特に、今年のゼミ生は3年生のみであるが、2年生のときに上
級生とともに小樽市の調査を行っており、小樽との比較を常に念頭においていたことが特徴的であっ
た。

学生研修記

大阪 佳奈

地域経済学科3年
登別青嶺高校出身

はるばる来たよ、函館

奥田ゼミⅡでは、1. 歴史的建造物 2. 食 3. 鉄
道 4. お菓子 という4つのグループに分かれて
函館へ研修に行ってきました。私のグループでは、
函館の菓子産業について調べ、函館土産は北海道産
としてではなく函館土産として確立している要因に
興味をもち、様々なお菓子屋さんにお話を伺いまし
た。また、函館にはたくさんのお菓子屋さんが存在
しているのにも関わらず、何故、菓子産業が盛り上
がっていないのか。そういった疑問をグループで話
し合う課程の中で函館における菓子の魅力や現地で
しか聞けない貴重なお話を伺う事が出来ました。

他のグループも、思い思いの研修を行っており、
奥田先生最後のゼミ生にふさわしい実りのある研修
になったと思います。

笠原 涼

地域経済学科3年
旭川北高校出身

これからの函館の可能性

私たち奥田ゼミⅡは9月5～7日の2泊3日の
日程で函館市に行きました。4つのグループがそれ
ぞれのテーマを設定し、市役所が各企業への訪問、
市民へのインタビューなど様々な角度から調査を行
いました。

私のグループでは函館の「食」をテーマに、地元
函館にとどまらず、道内外でその魅力を発信し続け
る函館グルメのこの先の可能性をメインに調査を行
いました。文字だけの情報では得ることのできない
たくさんの方々の貴重なお話を伺うことができ、改めて函
館の「食」についての魅力を発見することができま
した。それぞれのグループが去年の経験、反省を生
かしながらより良い研修を行うことが出来たと感じ
たのと同時に、この研修を通して得ることのできた
私たちの考えが、今後の函館市の発展に少しでも役
立つことがあればと思います。

佐藤信ゼミ I

参加学生数 16 名



佐藤 信

地域経済学科
教授

歌登地区の地域おこし協力隊と観光の取り組み

研修地：枝幸町

●研修目的

本研修は、自治体合併からほぼ10年が経過した歌登地区の現状を知るとともに、そこで働く地域おこし協力隊の活動内容を明らかにすること、さらに、枝幸町の観光対策についてのヒアリングを実施して、枝幸町歌登地区の地域づくりを展望することを目的とした。

研修地・日程

8月29日	枝幸町歌登支所 千疊岩
8月30日	うたのぼりグリーンパークホテル 枝幸町観光協会 枝幸町図書館
8月31日	オホーツクミュージアムえさし 三笠山展望閣

写真キャプション ① 千疊岩にて。② ホテル関係者へのヒアリング。③ バス車内にて。④ 地域おこし協力隊の佐藤諒さん。⑤⑥ 枝幸町観光協会にてワークショップ。⑦ オホーツクミュージアムえさしにて。



●総括

旧歌登町は2006年に枝幸町と合併し、研修時にはちょうど10年が経過していた。歌登地区にはもとも歌登グリーンパークといった滞在型の複合施設があり、観光客対応も熱心であった。こうした歌登地区はいま、どのような状況になっているか。

最初の訪問先の歌登地区では、合併以後も人口減少のテンポは変わらず、かつては5課50名ほどいた総合支所の職員は、一つの課の18名へ縮小させていた。また病院のベッド数を減らし診療所に再編するなど、行政機能の低下がすすんでいた。他方、毛ガニ漁獲量日本一の枝幸町との合併で、「海の枝幸と山の歌登」といった地域の特徴を観光に活かす努力をしているようだった。

歌登地区に2016年5月に採用された佐藤諒さん(本学卒業生)は、町内初めて採用された地域おこし協力隊員であるが、まず地区内全住民と知り合いとなり、次いで地区の住民組織の再編のためのヒアリングに取りかかっていた。

地域おこし協力隊のような、地域に根づいた取り組みは、まだ試行段階とはいえ、ゼミ生にも何らかの刺激になっていると思われる。ゼミ生は、初めての地域でもあるし、札幌周辺からは想像もできないような山村を経験し、地域の実情を直に学んでくれたことと思う。

学 生 研 修 記

石井 榛人

地域経済学科 2年
編入：拓殖大学北海道短期大学

若者の必要性

枝幸町は学生全員が初めて訪問する町だったので、研修は町内の見学と説明を受けるところから始まりました。その中で、町職員の皆様や観光協会の皆様と直接質問や意見を交わし、「若者の必要性」という町の現状が浮かび上がりました。研修中はこのことが常に頭の片隅にあり、学生として、若者として何ができるのかを考えさせられた機会となりました。

一方で、若者らしいアイデアとしては、漁業体験やご当地キャラといったありきたりな提案しかできませんでした。それは学びの出発点に立った感覚で、町を良くすることの難しさを感じました。

今回、地域研修に行ったことで、未来を担う者達としての使命感を与えられたように思います。まだまだ勉強不足なので、この研修を地域について考える新たなきっかけにし、今後の勉強に役立てば良いと思います。



三好 拓人

地域経済学科 2年
札幌手稲高校出身

地域研修を経験して

私たちのゼミは地域研修で宗谷管内枝幸町に行ってきました。地域研修に行き成長したと思うことが二つあります。まず一つ目はゼミの仲間との親睦が深まったことです。元々同じゼミのメンバーが多く違うゼミのメンバーとは地域研修に行くまでは何回かしか話したことがなく話しかけるのも少し戸惑っていましたがゼミのメンバーと二泊三日過ごしていくうちにお互いがお互いを理解し合うことができたと思います。そして二つ目は枝幸町を知れたことです。自分は札幌で生まれ育ったので枝幸町に限らず札幌以外の地方のことをあまり知りませんでした。しかし知らない地域に訪れ学んでいくうちにその地域ならではの良さや魅力を発見し理解することができ今までよりも少し視野が広がったと思います。

佐藤信ゼミ II

参加学生数 11 名



佐藤 信

地域経済学科
教授

金大亭の前で

石狩市における自治体合併10年後の地域づくり

研修地：石狩市

●研修目的

平成の大合併に伴って北海道の市町村合併も進んだ。研修の課題は、厚田村・浜益村が合併してできた石狩市に焦点をあて、第一に市町村合併に伴う住民の意識の変化、第二に特に浜益地区の交通状況、第三に石狩市の観光に関する取り組みを明らかにすることである。

研修地・日程

- 9月5日 石狩市浜益郷土資料館視察
石狩市浜益支所
千本ナラ視察
- 9月6日 石狩市厚田総合クリニックにてアンケート
石狩市観光協会にてヒアリング
石狩市内視察
金大亭にて鮭料理を食べながら意見交換

写真キャプション ① 浜益郷土資料館にて。② 浜益区総合支所でヒアリング。③ 千本ナラにて。④⑤ 厚田中央クリニックでのヒアリング。⑥ 石狩観光センターにて。⑦ 金大亭で鮭料理を食べるゼミ生。



●総括

自治体合併から10年を経て、かつての町村地区はどのような状況となっているか。今後の地域づくりに何が必要か。ゼミでは研修初日に石狩市浜益区を、翌日に厚田区と石狩市中心部を訪問した。

浜益区は海岸沿いに集落が点在する人口減少・高齢化が顕著な地域である。浜益区総合支所では、地区の行事日程付きカレンダーを合併前と変わらず発行するなど、コミュニティ維持に力を入れている。しかし、人口減少に伴う公共交通の後退は顕著である。厚田区の総合クリニックでは、そこへの定期バス運行などを要求する声が利用者からは多いことが伺えた。公共交通手段が縮小する中で、今後は試験的に始まった交通手段を如何に拡大してゆくかが課題となると考えられる。石狩市は札幌市に隣接しており、大消費地や観光客を主な対象とした道の駅設置が当面の計画であった。現在の石狩市の観光拠点は分散しているが、拠点づくりによる観光振興や物産販売が今後の可能性として期待できる。

ゼミⅡの学生たちは、事前の文献学習とヒアリングの準備、グループごとに設定した当日のテーマに沿って、現地での研修に臨んだ。初めての訪問先が多かったが、厚田にあるクリニックではインタビューを特に問題なく行っていた。昨年からの成長が感じられた研修であった。

学生研修記

河野 尚弘

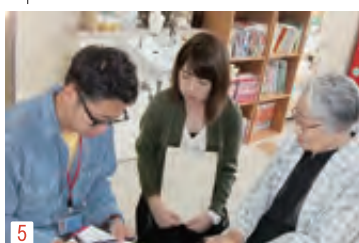
地域経済学科3年
室蘭栄高校出身

地域研修を終えて

私たちは市町村合併から10年経過した石狩市にってきました。

合併後の住民の生活変化や交通網に対する意識を調査するためのヒアリングや市役所の方とお話する機会を通して、石狩市の観光に関する計画や高齢化率50%を超える現状をどのように捉えているのかなど聞くことができました。また、私たちの意見を求められる場面もあり石狩市をより良くなるよう意見交換もしました。交通網の問題については、デマンド交通の導入によって、市にとってのマイナスなことをプラスにするよう努力してきたのかを学びました。また、石狩の自然豊かな地を巡ることでリフレッシュや座学だけでは感じ取ることができない新たな石狩の良さを感じ取ることができました。

今回の研修で学んだことや感じたことを基に今後の石狩をさらに良くなるよう活動していきたいです。



新輪 ももこ

地域経済学科3年
清里高校出身

石狩を訪れて

石狩市は平成の大合併で厚田村と浜益村と合併した。その中でも宿泊した浜益地区は小さな集落がいくつかあるまちである。商店の数は見たところ少なく、人口の大半が高齢者だ。そうしたまちだからなのか、集落の中での連携がきちんと取れているように感じた。それを特に感じたのは支所が出すカレンダーや集落を歩いた時に見えてきた家の様子からである。カレンダーには予め催事やがん検診、小学校の休みまで書かれており住民同士が連携の取れる形になっていた。また家と家の距離が近く誰かの家で話し合ったり、漁の準備をしている様子が伺えた。まちに若者をいかにして呼び込むかということも大切だが高齢化・人口減少は当然あるものだから、これからはこうした地域住民とまちを結びつけることが重要になってくるのではないだろうか。

中園桐代ゼミ I・II

参加学生数 15 名



中園 桐代

地域経済学科
教授



ニセコ町における産業振興と人材育成

研修地：ニセコ町

●研修目的

ニセコ町を事例として地域の産業振興と人材育成の現状と課題について学習することが研修の目的である。新幹線の札幌延伸のためのトンネル工事を見学し、地元の農家レストランで食事をとり、道の駅を見学するなどニセコの観光に関する場所を訪れ、その後町役場で観光と農業の現状と課題についてレクチャーを受けた。最後にニセコ高校で進路指導や就職先などについて進路担当の教員からレクチャーを受けた。

研修地・日程

10月6日 北海道新幹線昆布トンネル(宮田) 工区
ファーマーズキッチン ボンボン
ニセコ町役場
ニセコ高校
道の駅 ニセコビュープラザ

●総括

まず、午前中に札幌への新幹線の延伸のためのトンネル工事現場を(独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構北海道新幹線建設局倶知安鉄道建設所のご好意により見学した。工事は機械化が著しく進み、非常に少ない人数で工事が進められていることがわかった。

午後の訪れたニセコ町役場では観光と農業の現状と課題についてレクチャーを受けた。学生は外国人観光客の増加に目を奪われがちであるが、農業と観光業が地域内で支えあっていることが理解できた。農業はニセコの景観としても重要な資源である。加えてマンパワーとして農業従事者は観光業の振興も担っていることがわかった。観光客の増加に伴い労働力がより多く必要とされているが、町内では受け入れる住宅が不足している。しかし、農業従事者の中には冬季間に観光業に従事し、農業収入の少なさを補い生活を成り立たせているものもいる。つまり、農業と観光業の二足の草鞋を履くことによって生業を成り立たせ、企業社会に従属するライフスタイルとは違ったモデルを提示していると言えよう。

その一方で最後に訪れたニセコ高校では、農業や観光について学んだ学生が、卒業後、農業に就業するものが少なく、観光業でも就職後離職するものが多いことが説明された。若年労働力の定着に課題が多いことが明らかにされた。

全体としてニセコ町の産業振興とマンパワーの確保の課題について考えることができた。

学生研修記

水谷 紗理

地域経済学科 2 年
札幌東高校出身



辰己 俊

地域経済学科 3 年
札幌英藍高校出身



ニセコ町産業の相互作用を知る

今回私たちはニセコ町へ行き、産業を中心に地域社会の現状と課題について地域研修を行いました。ニセコ町にある昆布トンネルの掘削現場で発破に立ち会ったり、ニセコ高校の観光リゾートコースで使用する特別教室を見学したりといった貴重な体験をさせていただきました。役場では職員の方のお話を伺い、ニセコ町の基盤産業は農業であると知り、これまで持っていた観光主体のイメージが覆されたことは私たちにとって非常に印象的でした。ニセコ町農業は所得低迷や担い手不足、従事者の高齢化など多くの課題を抱えていますが、地産地消や農業と観光業の兼業により、所得増加と働き手の確保を工夫しています。

この研修を通して、ニセコ町の産業形態は「農業あつての観光業」を特色とし、相互に補い合いながら地域の活性化を目指しているとわかりました。地域への理解と見聞が広がり、実りのある学習になりました。

ニセコ町への地域研修を通じて

私たちは「農業における担い手の育成・確保」をテーマに、ニセコ町へ地域研修に向かった。北海道新幹線のための昆布トンネルを掘削中の工事現場見学から始まり、ニセコ町役場、北海道ニセコ高等学校という順で、各所でお話を伺った。役場では観光地としてのニセコ、農業としてのニセコという二つの観点からお話を伺い、ニセコ町は「農業という下地があつてこそその観光地」であつたということがわかった。また、ニセコ高校では農業の担い手育成について触れ、現段階では農業の担い手確保ができていないとも言えないということがわかった。

事前に資料を読んでもニセコ町は観光地としての印象が強く、農業と言われてもイメージがしにくいものであつた。しかし実際にニセコ町へと足を運ぶことによって、農業の存在意義というもの非常に大きいことが初めてわかった。このように現地に行つて初めて知ることができたものは多く、そういった点で地域研修は重要な役割を果たしているのだとも感じられた。



写真キャプション [1][2][3] 北海道新幹線昆布トンネル工区現場見学。

[4] ファーマーズキッチン ボンボンで。[5] 道の駅 ニセコビュープラザ

徐涛ゼミ I・II 2部徐涛ゼミ

参加学生数 13 名



徐 涛

地域経済学科
教授



外国人観光客誘致の実態調査：旭山動物園

研修地：旭川市

●研修目的

外国人観光客が急増するなか、道内観光地における外国人誘致（インバウンド誘致）の現状と課題を調査し、地域経済に与える影響を考える。今年は旭川市・旭山動物園で研修を実施した。

研修地・日程

- 10月4日 旭山動物園にて、広報担当の加藤明久さんより外国人観光客誘致の事業紹介・質疑応答。
旭山動物園にて、外国人観光客のアンケート調査を実施。
- 10月5日 旭山動物園にて、外国人観光客のアンケート調査を実施。
外国人の目線から園内の施設を調査。

●総 括

まずは、今回の地域研修にご協力いただいた旭山動物園ならびに広報担当の加藤明久さんに感謝を申し上げたい。

今年のインバウンド調査では、10月4日～5日の間、日本最北の動物園、旭山動物園において、外国人観光客に対してアンケート調査を実施した。

旭山動物園の入園者数は、2007年度の307万人をピークに減少しつづけ、昨年度はピーク時の約半分に当たる152万人になった。ところで、同期間中に、訪日外国人の来道者数（実人数）は71万人から208万人に約3倍に拡大した。外国人観光客は潜在的な客源として魅力的であり、その誘致に旭山動物園が力を入れ始めた。いうまでもなく、旭山動物園に来られる外国人観光客の実態、彼ら（彼女ら）の満足度と要望、ならびにその消費動向を把握することが喫緊の課題である。

今回の地域研修は、上記の課題に対して、初歩的ではあるが、1つの答えを模索するものである。したがって、来園した外国人の属性（どのような外国人がどのように、それになぜ来園したのか）、外国人の目線からみた旭山動物園のインバウンド誘致の現状、課題と要望を明らかにすることが本調査の目的である。アンケート調査は、中国の国慶節ゴールデンウィークに照準して、10月4日～5日の2日の日程で実施した。基本的に休憩中、散策中の外国人観光客に対して対面式で実施した。外国人が集まる可能性が高いフードコート、休憩所、レストランロビーならびに動物園の出入り口を中心に、外国人を相手にアンケート調査表を配布して、回答していただいた。調査期間は不幸にも暴風に会い、来園した外国人は予想より少なかったが、各調査チームの努力と外国人のご協力により59のサンプルをとった。その大半は中国本土と台湾からの観光客（各4割）であり、香港からの観光客が約2割で

学 生 研 修 記

言葉の壁を乗り越えるためには



及川 成就

地域経済学科3年
大麻高校出身

徐ゼミは旭山動物園でアンケート調査を実施しました。外国人来園者はほとんどが中華系の方でした。私はチームリーダーを務めました。当初、台湾や中国本土などからの外国人観光客に中国語で話しかけ、調査を行うことはとても不安でした。初めのうちは、やはり緊張して言葉が相手にうまく伝わらず、なかなかうまく進められませんでした。その対策について考え、チームのメンバーにも意見を求めました。落ち着いてゆっくりはきはきと大きな声で発音し、話しかけるタイミングを計り、アンケート表の提示の仕方を改善するなど、色々と工夫しました。また、1日目の調査後、先生と相談して2日目の調査にあたっての改善策などを提案し、アドバイスをいただきました。私がチームメンバーとともに試行錯誤した結果、59のサンプルがとれました。このように調査にともなうさまざまな困難を乗り越えることができました。

これは旭山動物園で実施された初めてのインバウンド調査でした。2日間という限られた時間のなかで、多くの成果と課題が明確になりました。また、今回の地域研修を通じて、片言の外国語を活かして外国人を相手に調査するという、日頃の学生生活では得られない貴重な体験をすることができたと思います。

写真キャプション

① AReaderの説明板。②～⑥ 調査風景。



1



2



3



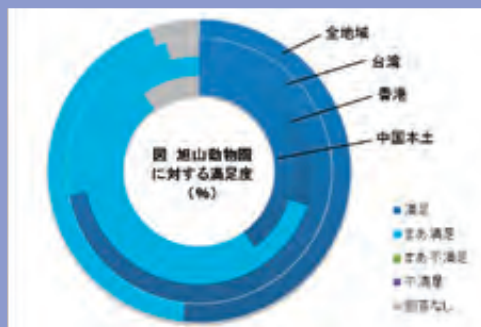
4



5



6



外国人来園者の満足度



ある。なお、実際には来園した外国人もほとんど中華系の方である。調査結果をみると、旭山動物園についての外国人来園者の満足度は、非常に高い。動物園のサービス全体について、外国人の52%が「満足」、43%が「まあ満足」と答えた。分野別にみると、園内放送、Wi-Fiの設置状況、食事メニュー、食事の満足度は、「満足」と「まあ満足」が合わせて8割台前半に止まっており、これでも優秀だといえるが、まだ改善する余地はある。旭山動物園は外国人に利用しやすいために、ホームページの多国言語化を実施した。また、スマホアプリAReaderも開発した。動物館舎前のAReaderマーカーをスマホのカメラで写すと、スマホの言語設定に対応した外国語コンテンツ（動物紹介ビデオなど）が利用できる。ホームページとAReaderを利用した外国人に尋ねると、ほとんどの人が高く評価した。その反面、これらのツールを利用した外国人はかなり少ない。認知度の向上、コンテンツの改善、ならびにWi-Fiの強化が必要であろう。

また、調査表を読むと、動物紹介、もぐもぐタイム掲示板とホームページの動物図録の多国言語化、もぐもぐタイムの同時通訳機についての要望が強かった。そのなかに安価ですぐに着手できるものもあり、多言語化の充実が急がれるべきであろう。

学生の感想文からわかるように、本調査は、学生たちがグローバルな視点をもって、どうすれば北海道の経済社会がもっと良くなるのかを深く考え、そして汗を流して地域密着的に実学を学ぶ良い機会になった。

これからも調査を重ね、旭山動物園のインバウンドを追跡して、継続的に調査結果を旭山動物園に還元して動物園のインバウンド拡大に寄与できれば、と考えている。



写真キャプション ⑦「もぐもぐタイム」の掲示板。⑧ 園内免税店。⑨ レストラン。
⑩⑪ 調査風景。

アンケート調査メンバーの声

●地域経済学科3年

坂保 洋亮 [大麻高校出身]

今回の地域研修に備え、アンケート内容の推敲、中国語の練習など行ってきました。実際に日本語が通じない方々に話しかけるには勇気が必要だと強く感じました。その分、今回の研修を通じて、積極的に行動する力が具えられたように思います。

●地域経済学科3年

柏木 達朗 [北海高校出身]

ほとんどの外国人観光客の人たちは暖かく、アンケートにもしっかり答えてくれました。

●地域経済学科2年

中田 佳樹 [北見柏陽高校出身]

多少の言語の壁があっても伝えたい気持ちがあれば、その意思をくみ取ってもらい交流することができると、笑顔で声をかけることにより、相手もそれにこたえてくれるなど、調査の内容以外にも学ぶべきことはたくさんあったと感じました。

●地域経済学科2年

石井 創一郎 [千歳高校出身]

僕は園内の看板や放送内容が外国人観光客にもわかるものなのかを確認しました。今回、日本人の視点ではなく、第三者の視点で観察することが貴重な経験だと思いました。



●地域経済学科3年

出崎 高弘 [札幌創成高校出身]

訪日外国人の方々は本当に親切で、調査当日はとても寒かったにもかかわらず屋外でもアンケートに答えてくださってとても感激しました。

●地域経済学科3年

南部 裕平 [北海高校出身]

中国語を話すことは人生で初めての経験で、初めは少し不安もありましたが、実際に話すと快く答えてくれる人が多く、次第に自信を持つことができました。この経験は人生の中でも数少ない経験です。

●地域経済学科3年

新保 美和 [北海道文教大学明清高校出身]

大学生活は残り1年しかありませんが、できればまたこのような活動に参加したいと思います。

●地域経済学科2年

坂本 啓輔 [とわの森三愛高校出身]

私は今回の調査の補助に回ることが多かったです。終わってみるとなかなかできない体験であったと感じ、もっと積極的になればよかったと、後悔しています。しかし、ありがたいことに動物園の方からは「来年も」ということを言っていたので、来年も調査ができるなら自分にとってかけがえのない経験になるように積極的に取り組みたいと思います。

西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 26 名



西村 宣彦

地域経済学科
准教授



台風直撃で強風が吹き荒れるかもめ島にて

新幹線時代の道南・江差町の『観光まちづくり』

研修地：江差町

●研修目的

2016年3月に新幹線が開業した函館では、観光客が増加し活況を呈している。新幹線効果は函館だけでなく、広域観光に取り組む周辺地域にも及んでいるのか。江戸期の栄華の歴史と文化という固有の観光資源を持つ江差町で、観光まちづくりの現状・課題・可能性を探った。

研修地・日程

- 8月30日 町内の主要観光資源を視察（いにしえ街道、旧中村家、旧檜山蘭志郡役所、追分会館で追分歌謡鑑賞、江差山車会館、開陽丸記念館、かもめ島半周散策）
- 9月1日 町役場にて行政ヒアリング（①観光振興、②地方創生、③財政）、いにしえ街道住民ヒアリング（6班17軒）、江差いにしえ資源研究会・室谷氏のレクチャーと単月蔵「チャミセ」の郷土料理の試食
- 9月2日 地区別・テーマ別住民ヒアリング（①中央・法華寺商店街A、②中央・法華寺商店街B、③かもめ島、④漁業地区、⑤農業地区、⑥福祉と笑いの里づくり地区。6班24軒）、開陽丸前にて役場職員＆町民との交流BBQ
- 9月3日 役場会議室にてまとめのゼミ＆研修成果発表会

写真キャプション ① 全国最年少の照井善之介町長の出迎えを受ける。② いにしえ街道聞き取り調査、塚靴店で。③ 夜遅くまでミーティングは続く。④ 3日目は地区別ヒアリングで「ナマコ養殖場」へ。⑤ 開陽丸前で役場職員・町民の皆さんとの交流BBQ。⑥ 役場職員の前で研修成果を発表。



●総括

江差は、北前船の終着地となる松前藩の港町として繁栄し、江戸期以来の歴史と文化が薫る、道内では珍しい特色を有する町である。観光地としては、名所旧跡・伝統文化・イベント等の見学といった旧来型の通過型観光が中心で、体験型・滞在型観光の強化が遅れ、観光入込客数はじり貧が続いてきた。北海道新幹線の開業は、江差町にも確かに観光客の流れを生んでおり、追分会館をはじめ主要観光施設の入場客数は大幅に増加した。しかし町内の商店主らの声のほとんどは、新幹線効果は感じられない、売り上げ増につながっていないというものだった。増加した観光客の多くは主要観光施設を見学し、すぐ町外に移動する短期滞在型と考えられ、滞在時間の延長と消費金額の増加をもたらす取り組みを、官・民それぞれで進めることが課題である。そうした問題意識に立った取り組みは、すでに町内の「いにしえ資源研究会」のメンバーらの手で進められていたほか、学生を受け入れていただいた町民の皆様がそれぞれ発する魅力と、彼らと過ごすという体験が「何よりの観光資源」と感じた学生が多かったようだ。学生と膝づめで交流して下さった照井町長をはじめ、私たちの研修をフルサポートしていただいた江差町追分観光課の皆様にご感謝申し上げます。

学生研修記

伊藤 みほ

地域経済学科 2 年
札幌第一高校出身



富田 弘哉

地域経済学科 3 年
鹿追高校出身



豊かな自然と郷土を愛する人々

江差を実際に訪れて、観光の柱である歴史的建造物や祭りの山車、江差追分などを見学させていただいて、江差の持つ長い歴史を感じることができました。また農業や漁業も盛んなことや自然の豊かさを知ることができました。特に海沿いの夕焼けや星空は、札幌では見られないような素晴らしい景色でした。夜海辺に座っていたら、流れ星をたくさん見ることができて、とても感動しました。聞き取り調査では、いろいろな地域・仕事の町民の方々のお話し伺ったことで、統計資料ではわからない現状がたくさん見えてきました。そこで一番印象に残ったのは、行政に頼らず自分たちで観光を盛り上げていこうと取り組んでいる人たちの存在です。地元を愛し、人と人のつながりを大切にする江差の人たちだからこそできることであり、実を結んでほしいと思いました。

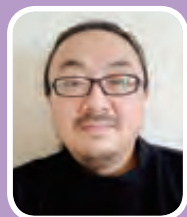
強い地元愛が可能にする「人に会いに行く観光」

北海道新幹線開通に伴い、江差町の観光も盛り上がっている。事前学習の時点ではそう聞いていたが、実際に訪ねて話を伺うと、マチの人々は新幹線開通効果をほとんど感じておらず、行政とのギャップを感じた。また町全体の雇用が不足していること、観光客が長く滞在しづらい環境であることなど、実際に訪ねなければわからない課題を発見した。また照井町長をはじめ役場の方々の前で、自分たちの研修成果や意見を発表できたいのも、とてもよい経験になった。また研修が進んでいくたびに、私たちを受け入れてくれる住民や職員の方々の好き（聞き取り調査時の対応）、江差を盛り上げようという住民主導の取り組みや、そうした取り組みに積極的に協力する人々の地元愛の強さに驚かされ、それこそが江差町の魅力だと感じた。今回感じた江差町の魅力を、知り合いなどにたくさん発信していきたいと思った。



平野研ゼミⅡ

参加学生数8名



平野 研

地域経済学科
准教授



陸別小学校にて

陸別町における地域振興商品開発とフェアトレード

研修地：陸別町

●研修目的

陸別町の新しい特産品「まちチョコ」などを調査することによって、陸別町の抱える問題や、人々の想いを考察していくことが目的です。特に地域開発とフェアトレードとを結びつけた陸別町の特徴に焦点を当て、事前学習や調査の方法の検討を行いました。

研修地・日程

- 7月14日 インタビュー（地域ブランド開発推進専門委員、陸別ブランド会議メンバー、陸別町振興公社社長、まちチョコ会議メンバー）
- 7月15日 陸別町産業振興課インタビュー、農畜産加工研修センター見学、インタビュー（陸別町小学校教頭、まちカモrito、陸別町議員）、街頭アンケート調査（ぶらっと1周年記念イベント会場）
- 7月16日 商工会会長インタビュー
陸別町外での特産品販売調査（帯広駅）

●総括

3年前から積極的に開発されている陸別町の特産品が、一定の成果を上げてきた背景を地域ブランド開発専門委員の秋庭智也氏を中心に関わった人たちのインタビューを通じて考察していきました。ゼミで学習してきたフェアトレード運動がどのように関連しているか、という視点を常に持ちながら行ったことで、調査の軸を全員が共通して持って臨めました。

アンケート調査などの結果から、フェアトレード商品を使った特産品であるにも関わらず、住民のフェアトレードの認知度が低いということに気づいていきました。そこに問題点を感じるとともに、さらなる可能性を見出しました。昨年名古屋での調査と比較して、都市と地方のフェアトレード運動の位置づけの違いなども議論されたことは、継続的な学習の成果でした。地域研修報告会でも名古屋との比較について触れたかったのですが、時間が足りませんでした。その考察は12月に開催されたインターゼミナール大会にて報告書という形でまとめました。共通の事項について比較して検討していく継続的学習の面白さを感じ取ったことは、今後の学習において重要な契機になったと思われます。

学生研修記

荒 大樹

地域経済学科 3年
苫小牧南高校出身



升田 成哉

地域経済学科 3年
札幌啓成高校出身



町おこしとフェアトレード活動

陸別町では、人口の3倍のフェアトレードチョコレートが売れているということを聞き、陸別町のフェアトレード活動を調査するため陸別町へ研修にきました。研修内容としては、関連団体・議員の方などにインタビューを行い、さらに街頭で町民アンケートを行ってきました。その際に明らかになった事は、新しい特産品にフェアトレード商品を意識的に使い、さらにそれが売れているにもかかわらず、フェアトレードはあまり知られていないということでした。一方で、フェアトレードが十分に認知されていない中でもフェアトレード商品が広がり得るという事実が驚かされました。認知度という課題がありますが、フェアトレードと町おこしに連携させ、どちらも良い方向へ発展させ得る陸別町の可能性を研修を通じて確認できたことは、今後の地域活性化と国際貢献とを考えていく良いきっかけになりました。

陸別町のフェアトレード運動

平野ゼミナールは、「陸別町」でフェアトレードに関してインタビューやアンケートでの調査を行いました。陸別町では、フェアトレードを関連させた地域特有の商品「特産品」の売り上げを伸ばしていました。フェアトレードにはその特徴から商品が高額になってしまう、という最大の難点があります。しかし陸別町では、特産品開発という「地域おこし」を組み合わせることで、その問題を解決しています。これは昨年調査に行った名古屋市が、各々に拡大してきた市民運動をフェアトレードで横に結び付けて運動として発展していたのとは異なり、陸別のそれは地域と一体になって新たに作り出していく運動でした。

今後の地方でのフェアトレード普及には、地域おこしとフェアトレードを結びつけ、生産者と地域の両方を発展させる、という新しいフェアトレード運動が必要であると学びました。

写真キャプション ① 秋庭氏へのインタビュー。
② 陸別町産業振興課インタビュー。③ 農畜産加工研修センター。④ 夜のミーティング。⑤ 街頭インタビュー。⑥ りくべつ鹿ジャッキー。



古林英一ゼミ I

参加学生数 15 名



古林 英一

地域経済学科
教授

イカを中心とした地域経済の構造を理解する

研修地：函館市

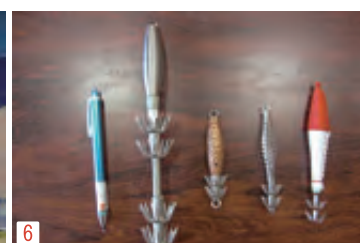
●研修目的

函館市はイカを市の「魚」としていることでもわかるように、古くからイカ漁業とその加工業が地域の重要な産業となってきた。本研修では、イカをめぐる産業的広がりについて、学ぶことを目的としている。

研修地・日程

- 8月29日 函館市水産課でのレクチャー
8月30日 函館市国際水産・海洋総合研究センターにおいて、イカ資源についてのレクチャーと施設見学、株式会社布目において、イカ加工のレクチャーと工場見学、東和電機製作所において、イカ釣り機に関するレクチャーと工場見学
8月31日 卸売市場の施設見学を予定していたが、台風被害発生により中止

写真キャプション ①② 国際水産・海洋総合研究センター見学。③ 株式会社布目で塩辛の生産工程見学。
④ 布目マスコット。⑤ 布目の様々な商品。⑥ イカ釣り針。



●総括

スルメイカは北海道における主要漁獲物のひとつであり、日常的に食されている食材であるが、その生産と利用についてはあまり関心を払わないのが一般的であろう。本研修においては、現代のイカ漁業が高度なハイテク機器を駆使して行われていることと、そうした機器を製作している函館市の東和電機製作所が、その高い技術力で世界的に大きなシェアを有していること、代表的な水産食品メーカーである布目では伝統的な食品である塩辛を始めとする多岐にわたる商品開発おこなうのみならず、近代的設備で極めて厳格な衛生管理が行われていること、また、国際水産・海洋総合研究センターでは、頭足類研究で世界的に有名な桜井泰憲北大名誉教授らのレクチャーで、海洋環境の変化によるイカの資源状態が変化していることなどを学び、イカ漁業が産業的に広がりをもっていることを理解できたと思われる。

学生研修記

大橋 康希

地域経済学科 2 年
帯広緑陽高校出身

藤原 瑞城

地域経済学科 2 年
帯広大谷高校出身

函館市の魚・イカ

タイトルにもあるように、イカは「函館市の魚」と呼ばれており函館の産業の一角を担っています。地域研修で、それがどのように生産・加工・流通されているのか学んできました。「調べて知識を得るだけでなく、現地に行って何かを感じ取ってほしい。」この教授の言葉のもと、私たちは地域研修に臨みました。水産加工場、機械工場など普段見ることのないものを見ました。その中で感じたのが「漁業って、こんなにもハイテクなのだ」ということです。漁業のイメージと言ったら糸を一つひとつ垂らし、手で引っ張っているイメージでしたが、機械一つで何匹も釣り上げていることに驚きました。

三日目の見学は台風のため中止となってしまったのが残念でしたが、私以外にもそれぞれ何か感じたことはあると思います。そういった意味で有意義な地域研修であったといえるでしょう。

函館のイカ産業

私たち古林ゼミ I は、函館市へ行きイカ産業について学びました。

まず、イカは私の中では網で一気に捕まえる漁業だと思っていました。ですが実際は、イカ釣り機という機械がありイカ専用の針があるということに関心を持ちました。また、なぜ函館ではイカを多く釣れるのか、という点も謎でした。函館市国際水産・海洋総合研究センターに行き、その理由についてお話を聞くことができました。イカは季節ごとに泳いでいる海洋が違い、これらの別々の海洋から来たイカが函館周辺の海にぶつかるため漁獲量が多い、というわけです。また、加工食品であるイカの塩辛などの製造をしている株式会社布目さんでもお話を聞くことができ、さらに加工過程の様子を見せていただくこともできました。漁業に携われる機会があまりない中で、私らでも手の出しやすい価格のイカについて直接イカと関わっている人たちのお話を聞くことができ、この経験はいつかせることができるかは分かりませんがいずれ将来に関わってくるような研修だったと思いました。

古林英一ゼミ II

参加学生数 13 名



古林 英一

地域経済学科
教授

日高地方における軽種馬の生産・育成・流通

研修地：浦河町・新ひだか町・様似町・日高町

●研修目的

サラブレッドは北海道の地域特産物であり、日高地方はサラブレッドの生産地としては世界有数の規模をほこる。生産牧場で生まれたサラブレッドは、育成・調教過程を経て、競馬で供用され、さらに繁殖馬として牧場に戻ったり、乗馬として供用される。この研修ではその全過程を見学・体験することで、北海道ならではの経験を積むことを目的としている。

研修地・日程

9月5日	日高軽種馬農協 北海道市場 ボロシリ乗馬クラブ
9月6日	JRA日高育成牧場 高村牧場（様似） 門別競馬場

写真キャプション ① 浦河AERUでの夕食。
②③ 高村牧場で作業体験。④ 門別競馬場の中継にゲスト出演。



●総括

北海道が馬の産地であることは大部分の学生が知ってはいるが、産業現場から馬が消えさった時代に生まれ育った彼らの多くは、馬を見たこともなければ触ったこともない。馬だけではなく、牛も含めて大家畜を触ったこともない学生が殆どである。

サラブレッドが競走馬として供用されるまでには、育成・調教過程や流過程が不可欠であり、日高地方にはこうしたインフラストラクチャーが集積し、さらに、生産をサポートする専門農協である日高軽種馬農協も存在する。

本研修においては、今後、全国で活躍するであろう学生が、北海道の地域産業のひとつであるサラブレッドの生産・育成・流通、そして競馬や乗馬といった全過程を身をもって体験し理解することができたと思われる。

様似町の高村牧場では、厩舎作業を体験することで、大家畜の飼養が決して簡単なものではないことを実感できたであろうし、ふだんテレビなどでは見ることのできない競馬の裏側で公正競馬確保のために多くの工夫がなされていることも知ったであろう。さらに、乗馬を通じて馬という動物を肌で感じるとともに、引退した馬も産業的に利用されて、おり、生産から、育成・調教、市場、競馬、そして乗馬といった諸産業が有機的に関連していることを理解したであろうと思われる。

とかくネット情報に左右されがちな学生たちにとって、単なる情報や映像ではなく、リアルな体験ができたことは有意義であったといえよう。

学生研修記

赤瀬 凌

地域経済学科 3 年
札幌月寒高校出身

加藤 立樹

地域経済学科 3 年
紋別高校出身

馬産業に触れてみて

私たち古林ゼミ II は今回、日高地方で世界的に有名なサラブレッドの生産、育成について学んできました。日高軽種馬農協では施設の方の話を聞くことで馬の競りがどのように行われているのか、競りにも季節によって様々な種類があるということを知ることができました。さらに JRA 日高育成牧場では実際に競走馬の調教・育成の様子を見学させていただきました。普段経験できないことを実際に身をもって体験するという研修テーマのもと、施設の見学の他に馬小屋の掃除や放牧、乗馬実習や競馬場でのレース見学などを行うことで、自身にとっても貴重な体験をすることができました。

今回の研修を通して、馬産業に対して知識が全くありませんでしたが、施設の方の話を聞いたり現場の見学をしたことによって馬産業というものがかかにか重要な産業で他の家畜と違うんだということを学ぶことができました。この経験をいつか生かせられればいいなと思っています。

競馬体験記

古林ゼミ II では今回、馬が生まれてからどのような過程を経て競走馬として活躍するのか、またその後はどのような利用手段があるのかを学ぶため、実際に競走馬の生産・育成で有名な日高地方に行きました。

一般の人ではあまり入ることのないセリ場の裏側や調教施設など行きました。そこでは馬に対して様々な工夫がされていて馬に対する愛情と情熱を感じました。また、高村牧場では厩舎の清掃をさせていただき、想像以上に重労働で牧場の方の苦勞を少しは理解できたのではと思いました。他にも、引退した競走馬としての 1 つの利用手段である乗馬を体験することや、競馬場での実況見学、馬券を購入し大儲けする夢も見ることが出来ました。

今回の地域研修を通して、貴重な体験をしたことで資料やネットといった情報からでは感じるることのできないものやわかったことが多く、北海道の主要産業の 1 つである競馬産業について理解と知識を深めることが出来たと感じています。

水野邦彦ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 21 名



水野 邦彦

地域経済学科
教授

月形樺戸博物館（旧樺戸集治監本庁舎）前にて

北海道開拓当初の囚人労働を学ぶ

研修地：月形町・当別町

●研修目的

「北海道の和人の歴史は流刑囚から始まる」といわれるとおり、移住民や屯田兵が入植するに先立って開拓の基礎整備にあたったのは囚人たちであった。過酷を極め非人道的であった囚人労働の実態を学ぶべく、ゼミでは月形樺戸博物館（旧樺戸集治監）を訪れた。

研修地・日程

8月16日 峰延道路（囚人道路）
月形樺戸博物館（旧樺戸集治監）
9月17日 篠津山霊園（囚人墓地）
劉連仁生還記念碑

写真キャプション ① 月形樺戸博物館で浦崎さんと。② 篠津山囚人墓地。③④⑤ 劉連仁生還記念碑前で。⑥ 来歴がしるされた碑文。⑦ 劉連仁生還記念碑を囲んで。



●総括

和人による北海道「開拓」は、集治監を拠点に、本州から移送した囚人を労働に駆り立て、道路を建設し耕作地を開拓するところから始まった。最初に集治監が置かれたのが今日の月形町である。極寒の冬にも強行された各種工事は過酷を極め、多数の囚人が死亡していった。のちに集治監は空知・釧路・網走にも建設され、それらの集治監に収容されている囚人たちによって上川道路・網走道路などが開鑿されたが、これらの道路は北海道内の基幹道路となり、その後の産業化や経済発展の礎をなしている。

囚人労働は、のちの朝鮮人労働とともに、今日の北海道の形成に大きな役割を果たしたが、労働者に甚大な犠牲を強いるものであった。ともすれば忘れがちな北海道近代史の裏面を学ぶべく、ゼミでは囚人労働および集治監にかんする痕跡や資料がみられる月形町において研修をおこなった。

一行は樺戸博物館で浦崎満さんの懇切丁寧なご案内ご説明を受け、翌日は収監中に死亡した囚人たちの眠る「囚人墓地」を訪れた。つづいて当別町に向かい、13年のあいだ北海道の山中に隠れていた劉連仁さんについてゼミ学生の報告を聞き、生還記念碑を見学した。

学生研修記

石持 佳宏

地域経済学科 2年
旭川西高校出身

歴史をふくめて地域を知ることが大切

月形村は 1880 年に月形潔の指示のもとに総懲治監として建設された。のちに樺戸集治監とよばれるこの監獄は、札幌ドーム約 2 個分の大きさで、堀の高さが 5.5m あったが、それでも脱走囚がいたようだ。樺戸博物館で聞いた話で吉村昭の小説『赤い人』に興味をわき、読んでみると、冒頭で「筒袖の着物を着、襦袢を身につけているが、すべてが赤い」と表現される囚人たちの北海道開拓の実態を描いた歴史小説であった。

樺戸博物館で説明くださった浦崎満さんのお話でいちばん心に響いたのは、過去の悲劇を繰り返さないための温故知新、囚人・移住民・屯田兵による開拓の貢献の歴史を後代の人に伝えつづけること、歴史をふくめて地域を知ること、これらのことが大切だということであった。このお話はおそらく時代を問わず重要なことなのだと思う。



中城 有梨

地域経済学科 3年
札幌新川高校出身

知られていない囚人労働

北海道の広大な未開拓地を開拓した「先人たち」とは先住民や移住民だと学校で教えられたような気がし、そう思いこんでいた。ところが「先人たち」には囚人がふくまれることを私ははじめて知った。研修で、この囚人たちが置かれた劣悪な環境や開拓の過酷な労働を知り、いままで自分がこれを知らなかったことを恥じるとともに、なぜこの事実が北海道で正当に評価されていないのかを疑問に感じた。

足に鎖をつけたまま労働する囚人たちが長い道を歩かなか死んでしまうことがあり、さらに死体が道に放置されたことも多かったという。死体をみた住民が、せめて土をかけたこともあったが、のちに掘り返された死体には鎖がついたままであったそう。

篠津山囚人墓地には、静かで寂しい雰囲気が漂っていた。かれらが言葉を発することはないが、伝わってくるものがあった。



水野谷武志ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数28名



水野谷 武志

地域経済学科
教授

噴火湾パノラマパークにて

過疎地域のまちづくり

研修地：厚沢部町・木古内町

●研修目的

過疎地域におけるまちづくりの現状と課題を具体的な地域に学ぶ。今回は道南の2つの地域を設定した。1つは様々な交流・移住政策を進めている厚沢部町と、北海道新幹線開業によるまちづくりを進める木古内町である。

研修地・日程

- 8月22日 厚沢部町役場（総務政策課）、素敵な過疎づくり株式会社、旧清和小学校で「ちょっと暮らし」滞在者と石釜ビザパーティー、道の駅あっさぶ、ゆいまーる厚沢部（介護付有料老人ホーム）、「ちょっと暮らし」住宅見学、地域おこし協力隊員の農場を見学
- 8月23日 サラキ峠で威臨丸の話を聞く（木古内町観光協会）、木古内町役場（まちづくり新幹線課・産業経済課）、新幹線木古内駅ホーム入場見学、道の駅みそぎの郷きこない（木古内公益振興社・観光協会）、木古内みそぎまち歩きに参加（観光協会）、木古内町郷土資料館「いかりん館」（木古内町教育委員会）、新幹線ビュースポット
- 8月24日 噴火湾パノラマパーク（八雲町）、帰札

写真キャプション ① 道の駅あっさぶ。② 「ちょっと暮らし」滞在者と石釜ビザパーティー。③ 地域おこし協力隊員の農場で。④ 新幹線木古内駅を見学。⑤ 道の駅みそぎの郷きこない。⑥ 木古内みそぎまち歩きに参加。



●総括

厚沢部町では、厚沢部町の移住政策、「素敵な過疎づくり株式会社」の取り組み、持続可能な高齢者コミュニティをめざす「ゆいま〜る厚沢部」の取り組み、地域おこし協力隊の活動について関係者に話を聞き、厚沢部町の交流・移住政策によるまちづくりの現状を学ぶことができた。厚沢部町の先進的な取り組みには熱い思いと行動力のある地域おこし協力隊の存在が大きかったことがわかった。

木古内町では、木古内町まちづくり新幹線課の新幹線開業前後の取り組み、道南西部9町の広域観光拠点としての道の駅の展開について関係者の話を聞き、また木古内町の体験観光メニューを実際に体感することによって、木古内町の新幹線開業によるまちづくりの現状を学ぶことができた。新幹線開業までに北海道と連携した木古内町及び周辺9町による様々な努力と企画が投入されてきたことを知るとともに、その効果が北海道内外から訪れる道の駅の盛況ぶりに表れていると感じた。

両町共通の今後の課題は、町が主導してきた先進的な取り組みに対して町民の参画を一層取り付け、町全体としての地域づくりに発展させることではないだろうか。

学生研修記

水谷 有沙

地域経済学科 2年
深川西高校出身

池浦 歩輝

地域経済学科 3年
江差高校出身

過疎に対する厚沢部町の取り組み

水野谷ゼミは2グループに分かれて研修をしました。私達のグループは、田園回帰と過疎の解決について調査するため、厚沢部町に行きました。厚沢部町では、「素敵な過疎のまちづくり条例」を出しており、過疎を受け入れつつ、活気のある町を目指して活動していました。地域おこし協力隊であった人達は、素敵な過疎づくり株式会社で働いて、条例をすすめる中心的役割をしていたり、農家で働いていたり、0円で免許を取得する合宿を企画したりと、厚沢部の魅力を知ってもらうために、様々な方面から町を盛り上げているように感じました。実際に、「ちょっと暮らし」をしている方々とお話をしましたが、魅力が伝わっていると感じました。現在も、過疎化は進行していますが、厚沢部町のように、過疎を受け入れつつ、魅力をしっかり持つことで、少なくとも町の維持へと繋げることは可能であると学ぶことができました。

地元の現状とこれからの取り組み

水野谷ゼミは道南の厚沢部町、木古内町を過疎というテーマの下で調査しました。私たちのグループは北海道新幹線が開通し、北海道に入って最初に停車する地域である木古内町を訪問しました。想像以上に過疎は進んでいたものの木古内町の人々は諦めてはいなく、新幹線開業だけに頼って地域活性化を図るのではなく自分たちの力で地域を変えようとする姿勢について私たちの目で確かめることができました。木古内町だけでは限界があるということで近隣9町と連携し、周遊する形の観光スタイルを作り上げていました。今回の研修では自分の地元付近である道南に行くことになりましたが、新しい魅力が沢山見つかりました。皆さんにも自分の地元や地域にもっと目を向けて見てほしいと感じることができた研修でした。



宮入隆ゼミ I・II

参加学生数 26 名



宮入 隆

地域経済学科
准教授

新わたる農業協同組合にて

果樹産地の現状と農業による地域活性化の可能性

研修地：仁木町・余市町

●研修目的

道内の果樹栽培面積の 6 割を占め、主要果樹産地となっている余市町・仁木町を事例に、果樹産地の現状と課題を明らかにするとともに、観光農園、ジュース加工やワイナリー経営等の農業の多様な取り組み実態から、農業を核とした新たな地域活性化の可能性を検討する。

研修地・日程

- 8月22日 JA新わたる本所（仁木町）
フルーツパークにき（仁木町）
8月23日 JA新わたる集出荷施設（仁木町）
久保農園（仁木町）
大久保農園（仁木町）
8月24日 JAよいち本所（余市町）
ドメヌ・タカヒコ（余市町）
ニッカウスキー（余市町）
8月25日 余市ワイナリー（余市町）

写真キャプション ① JA新わたるの集出荷施設見学。② 久保博さんの聞き取り調査。③ 大久保農園のブルーネ園地。④ 大久保農園での昼食。⑤ ドメヌ・タカヒコでの聞き取り調査。⑥ JAよいちでの聞き取り調査。⑦ 余市ワイナリーでの聞き取り調査。



●総括

仁木町では、米の生産調整以後、リンゴを主とした果樹産地へと転換し、その後、おうとう生産の拡大など変化はありつつも、近年まで果樹を主体として地域農業を展開してきた。しかし台風被害を受けたことで、リスクの高い果樹からミニトマトへの転換を図る経営が増加し、現在は果樹＋野菜複合経営が主体となるなど地域農業の大きな構造変化を遂げた。そのような中でも果樹経営を維持していくために、高収益の確保と省力化を同時に目指す経営では、観光農園や直売所といった経営の多角化を行っていた。

余市町では、農協がジュース等の加工事業を担い、高付加価値化や省力化により果樹産地としての存続を図ってきたが、近年はさらに、醸造用ぶどうの共同販売を主軸にしながら、新たな経営体の支援も行っていた。また各ワイナリーでは、経営的なこだわりの相違を見せつつ、地域全体でのワインツーリズムへと発展させていた。

事例調査から得た知見を基に、学生たちは、果樹生産の経営安定化を図る複合化や加工特産品開発など各種取り組みの「集積」を新たな地域の魅力にすることが、人口減少に歯止めをかけ、農業労働力不足を解消するための長期的方策であると結論づけた。

学生研修記

佐藤 結衣

地域経済学科 2 年
札幌新川高校出身

果樹産地から見たこと

仁木町では果樹産地から「果樹・野菜複合経営」へ転換し、基幹作物をミニトマトへ移行することで経営的安定化が図られていました。一方、余市町でもミニトマトを中心に野菜への移行は見られましたが、依然として果樹へのこだわりも強く、農協はりんごの加工事業に力を入れており、高付加価値の実現や作業の軽減化などを図っていました。

このように、互いに隣接した地域でも、地域農業の目指す方向やこだわりの相違を強く感じました。また、ワインブームの中で多数のワイナリーが集まり、「ワインツーリズム」による地域の活性化が図られる取り組みも知りました。

今回の研修で慢性的な労働力不足や果樹生産のリスクなど現状の問題点を実感する一方で、加工事業による収益の拡大や、ワイナリーの集積による集客力の拡大など、これからの地域活性化への可能性を肌で感じる研修となりました。



青木 治斗

地域経済学科 2 年
平取高校出身

地域研修で見えてきた果樹産地の可能性

私たちのゼミは「果樹産地の現状と農業による地域活性化の可能性」をテーマに掲げ、北海道の主要果樹産地である余市町・仁木町を事例に調査を行いました。

現在、果樹産地はジュースやワインといった加工事業による収益の拡大に力を入れていること、果樹生産には天候、収穫時期の長さ、消費者ニーズの変化等のリスクを抱えていること、人口減少等の影響で著しい労働力不足に見舞われていることを JA や農家を訪問し明らかにすることができました。

個別経営では、ワイナリーや観光農園等に重点を置く一方で、ミニトマト等の野菜に作物転換を行うなど、複合化により経営の安定化を目指しています。そのような新たな経営方針が今後の地域のブランド力の強化を促進し、魅力ある地域づくりにつながることを学びました。農業の新しい形を開拓しようとするこの地域に地域活性化の可能性を感じました。

山田誠治ゼミ I

参加学生数 13 名



山田 誠治

地域経済学科
教授

地域ブランドを生かした余市町の課題

研修地：余市町・小樽市

●研修目的

北海道では、様々な資源の地域ブランド化によって、新しい分野を開拓しつつあるが、ワインやウiskiを生かした地域活性化の取組について、余市町と小樽市の工場やワイナリー、さらに関連する施設に向き、現場の実情や政策課題について調査することを目的とした。

研修地・日程

- 9月13日 小樽の北海道ワインの工場を見学。
小樽市内のNPO法人ウィンクスター北海道を見学。
- 9月14日 余市ワイン工場を見学。
㈱自然農園にて小川信一郎氏からオーガニックワインの説明を受け、インタビュー調査を行う。
OcciGabi Wineryオチガビ・ワイナリーで専務取締役落希一郎氏より説明を受け、インタビュー調査を行う。
- 11月11日 余市町役場にて、経済部佐々木考太氏から、「余市ワインプロジェクト」の説明を受ける。
余市町のニッカウキスキー北海道工場・余市蒸溜所を見学。

写真キャプション ① 北海道ワインの工場で見学。
② ブドウ栽培だけでなくブルーベリーも。③ 素敵な木造のカチガビワイナリー。④ 余市ワインも6次化を展開。⑤ オータムフェストでも出店。⑥ 11月にも再訪して余市ワインプロジェクトを学ぶ。



●総括

主にワイナリーを中心に見学し、実際に製造工場を目にし、また現場の担い手の方々の話を直接聞き、ある意味実体験も含めて学ぶことが多々あった。

この地域においても過疎化や人口減少、さらに高齢化に伴う農業の後継者難などの状況がある。画期的な反転は望めない中、どのような策を弄するか、が一つのポイントであった。

余市町では、果樹栽培に適した自然条件とテレビドラマ「マッサン」で高まった知名度を生かし、身の丈のペースでありながら、ワインの醸造とブドウ栽培を根子にして、新たな新規就農とワイン製造を着実に増やし続けており、また、それを食や観光に結び付け、広く道内外に打って出る可能性が実感できた。栽培面積もワイナリーも着実に増え続けており、今後高速道路の開通や様々なインフラ整備とともに、過疎化に対抗することが期待できることを学生も感じ取れたのではないだろうか。

また、見学したワイナリーは、経営者の個性、経営形態、戦略などがそれぞれ多面的個性的であり、地域性・製造方法・そしてその戦略など、いろいろな知恵と考えを動員して努力されていることが理解でき、現場からの理解という研修の目的は達することができたのではないかと感じた。

学生研修記

湯口 里帆

地域経済学科 2年
登別明日中等教育学校出身

村尾 啓太

地域経済学科 2年
札幌清田高校出身

6次産業化による地域ブランド化

私たちは小樽市と余市町を訪問し、2日間にわたりワイン産業による地域ブランド化をテーマに研修を行いました。いくつかのワイナリーを訪問見学し、生産者の方に聞き取り調査を行いました。

今回訪問したワイナリーは、自社農園で栽培したブドウを使用し製造販売まで行い、6次産業を実現していました。また、ワイナリーごとにコンセプトや規模などが全く違い、そういった特徴や強いこだわりがブランド化に繋がっているのと感じました。ただ、輸出には難点がある他、後継者不足の問題もありました。

今後、小樽市や余市町がワイン産業で発展していくためには、ワイナリー同士での協力が不可欠であり、特に、ワイン特区の政策のもとで、ワイン産業の観光化にも力を入れている余市町は、自治体との連携でもっと活動していくべきだと思いました。

小樽・余市の地域ブランド戦略

私たちのゼミは、地域ブランドというテーマのもとに、現在盛り上がりを見せている小樽・余市のワイン産業について調べ、地域研修の対象に、2日間に渡り現地を訪問し、調査・見学を行いました。

研修では、特色の違った様々なワイナリーに行き、そのワイナリーの独自の販売戦略や地域に対する考えを知ることができ、その中でも特に目を引いたのが、第6次産業化という考え方が、実際に展開されていることでした。原料の栽培から加工、製品にして販売するという全ての過程を一つの企業が行うというものです。その結果、今まで外部に委託していた作業を内部で行うことにより、他の地域の第2・第3次産業の事業者が得ていた付加価値を自分の地域で得ることができ、活性化に繋がり、この6次産業化が今後、様々なところで行われていけば、現地の地方の現状を打破できるのではないかと感じました。

山田誠治ゼミ II

参加学生数 12 名



山田 誠治

地域経済学科
教授

北谷町役場での研修後に

沖縄の観光振興の現状と課題

研修地：沖縄県北谷町・那覇市・読谷村

●研修目的

北海道では、自然などを生かした観光振興が図られているが、まったく条件が異なる沖縄でも、その自然などを観光資源として生かし、観光振興を進めているが、その沖縄県の政策、北谷町の取り組み、各種観光施設を見学し、比較調査を行うことを目的とした。

研修地・日程

- 10月25日 那覇市内の観光施設を見学。
10月26日 北谷町建設経済部商工観光課伊波孝規氏より、北谷町の観光政策の課題と現状について解説を受け、インタビュー調査を行う。
沖縄県庁にて、「沖縄観光の現状と課題について」研修を行い、インタビュー調査を行う。
北谷町のアウトドア業者を対象に、グループでアンケート調査を実施。
10月27日 道の駅「かでな」を見学。
古宇利島の観光施設を見学。
美ら海水族館の施設を見学。
10月28日 読谷村の観光施設を見学。
自由行動。

写真キャプション ① 沖縄のリゾート開発中の北谷。② 米軍関係者の住宅。③ 嘉手納は基地で占められる。④ 沖縄県庁で観光政策について聞く。⑤ 自然を生かした古宇利島の施設。⑥ 美ら海水族館から見える東シナ海。



●総括

自然条件は北海道と相当異なり、また基地問題が連日のように伝えられる中で、実際に訪問調査をすることによって、より具体的な事情やそれに向き合う担い手の知恵と努力に学生たちはいろいろ実感できた研修となったのではない。

交通のインフラ整備やソフト面での充実の沖縄独自のおもてなしの取り組み、増加するインバウンドをそれぞれの国民性に合わせて位置づけなおし、きめの細かい対応ができるように様々な工夫をしていること、観光資源の生かし方や、それとなく感じられる遊び心など、沖縄の県民性と琉球の歴史の一端をそこはかとなく感じられる調査だったのではないだろうか。

「食では北海道にかなわない」という県庁の担当者の言葉には、それ以外では本道に勝っているという自信も感じられ、沖縄にとって基幹産業である観光の発展を実感させられるものであった。「世界有数のリゾート地」をめざす大きな志を感じさせられ、なによりも学生たちみんなが、その美しい自然を体感し、温かい人たちとの触れ合い、感動を持ち帰ったきたことに、沖縄の観光業の到達の高さを伺うことができる研修であった。

学生研修記

伊藤 瑞希

地域経済学科 3 年
札幌新川高校出身

工藤 怜央

地域経済学科 3 年
札幌平岸高校出身

沖縄観光産業を学んで

山田ゼミでは、沖縄の観光による地域づくりについて学んできました。那覇市では、沖縄県庁の川上さんから、沖縄県観光振興計画について、現状と課題についての説明を受け、観光収入の動向や海外誘客実績などについて、具体的な数字をもとに詳しいかつ熱のこもった解説を受けてきました。また近年の動向としてツアーを利用しない観光客の増加に対して、そのフィット化をどう進めるか、とか、WiFiなどのインフラ設備をきめ細かく増設することなどを通じ、現状の把握から、今沖縄に足りないものを改善している、ということを知り、こうした取り組みが誘客そして観光ブランド化につながっていくのだらうと思いました。また、外国人観光客に対しては、「日本」を強く売り出すのか、また「沖縄」を主張するのか、は今後も沖縄にとって大きな課題となっていると感じました。

観光で発展する沖縄

私たちは沖縄がこういった観光事業を行い地域が発展しているのかを調査するため、主に北谷町・那覇市で研修を行った。米軍が多く立地している北谷町では、段階的に返還された米軍基地の跡地に巨大ショッピングモールや人工ビーチを築き、地域の活性化につながっていることが分かった。またアメリカンビレッジと称して、米国人の文化を取り入れ、ある意味「共存」のように利用していることが面白い発想だと感じた。那覇の沖縄県庁では、近年急激に観光客が増加している沖縄がこういった政策を行なっているのか調査した。その中で特に印象に残っているのは、「軸となるブランディングを創り国・地域によってPRを変える」というものであった。PRを対象の国、地域ごとに合わせたものに変え、観光客増加を目指す政策は素晴らしいと感じた。

今後も発展していく沖縄の観光業に目を向けていきたい。



総勢で20ゼミが2日間に分かれ、3つの教室で発表しました。報告会では、それぞれのゼミが事前学習と現地調査の結果をまとめ、そこから得た成果と課題について発表しました。昨年に引き続き教員コメンテーター制を導入し、各ゼミの発表に対して質問や講評を出して、学生と意見交換しました。

◎11月26日 報告ゼミ順序と研修地

- 40番教室 コメンテーター：西村先生(司会)、大貝先生、濱田先生
 - ①大貝ゼミⅠ(十勝) ③西村ゼミⅠ・Ⅱ(江差)
 - ②水野谷ゼミⅠ・Ⅱ(厚沢部) ④地域インターンシップ合同ゼミ(天売島)
- 50番教室 コメンテーター：佐藤先生(司会)、宮入先生、水野谷先生
 - ①水野谷ゼミⅠ・Ⅱ(木古内) ③宮入ゼミⅠ・Ⅱ(余市・仁木)
 - ②川村ゼミⅡ(札幌) ④中岡ゼミⅡ(ニセコ)
- 16番教室 コメンテーター：中岡先生(司会)、内田先生
 - ①中岡ゼミⅠ(ニセコ) ③大貝ゼミⅡ(新潟)
 - ②平野ゼミⅡ(陸別) ④内田ゼミⅡ(留萌)

◎12月3日 報告ゼミ順序と研修地

- 40番教室 コメンテーター：徐先生(司会)、奥田先生
 - ①奥田ゼミⅡ(函館) ③徐ゼミⅠ・Ⅱ・2部(旭川)
 - ②山田ゼミⅠ(余市・小樽) ④佐藤ゼミⅠ(枝幸・歌登)
- 50番教室 コメンテーター：浅妻先生(司会)、古林先生
 - ①古林ゼミⅠ(函館) ③水野ゼミⅠ・Ⅱ(月形・当別)
 - ②浅妻ゼミⅠ・Ⅱ(北見) ④山田ゼミⅡ(沖縄)
- 16番教室 コメンテーター：宮入先生(司会)、山田先生
 - ①佐藤ゼミⅡ(石狩) ③川村ゼミⅠ(札幌市)
 - ②浅妻ゼミ2部Ⅰ(北見) ④古林ゼミⅡ(日高)



北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2016



北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<http://hgu.jp/>

<http://econ.hgu.jp/>

2017年3月発行

制作 : (株) ラボット